＜原　著＞

共感性のバランスと社会的行動の関連

佐藤　有佳*　今井　正司**　三宅　佑果*　熊野　宏昭***

要　約

共感性は社会的行動との関連が示されており，円滑な社会生活を送るために重要な能力であることが知られている。本研究では共感性の構成要素間のバランスと社会的行動との関連を検討した。クラスター分析を行い分類された共感性の５つのクラスターを独立変数とし，身体的攻撃行動の抑制，向社会的行動の促進を従属変数とした一元配置分散分析を行った。その結果，両社会的行動ともに共感性のサブタイプの主効果が示された。多重比較の結果，身体的攻撃行動の抑制と向社会的行動の促進において，視点取得を伴う共感性全般の高さは共通して関連がある一方で，全体的な共感性の低さは向社会的行動の促進においてのみ阻害要因となることが示唆された。このことから，身体的攻撃行動なのか向社会的行動なのかによって，共感性の構成要素間のバランスとの関連の仕方が異なることが示されたため，共感性への介入は支援のターゲットとする行動を明確にする必要が示唆された。

キーワード：共感性，向社会的行動，身体的攻撃行動

問題と目的

社会生活を円滑に送るためには，自分自身の欲求やリスクと他者の利益との調整を行い，時には他者の利益を優先した向社会的行動を自発的に行うことが必要である。たとえば，道端で財布を拾った際，自身の時間や労力を使って交番に届けに行くことは，財布を落とした人の利益を優先した行動であると考えられる。また，他者との間に問題が生じた際，攻撃行動による対処は問題が大きくなることが考えられるため，多少の怒りを感じた場合も，攻撃行動を抑制し，その他の問題解決方法を選択することが求められる。そして，攻撃行動の抑制や向社会的行動の促進といった社会的行動と共感性の間には関連が示されており，円滑な社会生活を送る上で共感性が重要な役割を果たしていると考えられる。

共感性は個人の内的状態すなわち思考や感情，視覚，意図についての認知的な気づきである「認知的共感性」と，他人についての代理的な感情的反応である「情動的共感性」（Hoffman.M.L, 2000　菊池・二宮訳，2001）の二つの側面を持つ多次元的なものとされる。共感性の多次元的な側面を測定する尺度としてDavis（1983　櫻井，1988）の対人的反応性指標（Interpersonal Reactivity Index：IRI）があげられる。IRIは他者の立場に立って物事を考える「視点取得」，本や映画などの架空の人物の気持ちと自分自身を同一視する「空想」，援助が必要な場面における不安や動揺などの自己志向的な気持ちの「個人的苦痛」，不運な他者への同情や関心などの他者志向的な気持ちの「共感的関心」という４つの下位尺度を有し，視点取得と空想を認知的共感性とし，個人的苦痛と共感的関心を情動

*早稲田大学大学院人間科学研究科
**名古屋学芸大学ヒューマンケア学部
***早稲田大学人間科学学術院

的共感性として位置づけている。

共感性の構成要素と社会的行動に関する研究において，共感的関心得点と援助行動，個人的苦痛得点と援助行動との間には，それぞれ正の相関が示されている（登張，2000）。また，暴力的犯罪群は非暴力的犯罪群に比べて，視点取得得点が有意に低く，個人的苦痛得点においては有意な差は認められない（岡本・河野，2010）などの知見が得られている。しかしながら，共感性は多次元的に構成されるものであり，構成要素間において相互に影響を及ぼしていると考えられる。そこで本研究では，共感性における構成要素間のバランスと社会的行動の関連を検討することを目的とする。また，攻撃行動に関しては，身体的攻撃や言語的攻撃，間接的攻撃など攻撃の形態により共感性との関連も異なることが考えられる。例えば，身体的な攻撃には視点取得の低さが考えられるが，間接的な攻撃では視点取得が高い事が示されている（Richardson，Hammock，Smith，Gardner，& Signo，1994）。そのため，本研究では，社会生活を円滑に営む上でより問題行動として捉えられることの多い身体的攻撃を攻撃行動として取り扱うこととする。

方　法

1．調査対象

関東圏の私立大学生413名に質問紙調査を実施した。記入もれや記入ミスのあった回答を除外し，合計332名（男性150名，女性182名）の回答を有効回答として分析の対象とした。

2．調査材料

(a) 共感性の測定：対人的反応性指標（櫻井，1988）を用いた。多次元的な共感性を測定する尺度であり，高い信頼性と妥当性を有している。「視点取得」「共感的関心」「個人的苦痛」「空想」の４つの下位尺度で構成されている。回答は「全くあてはまらない（1）」から「よくあてはまる（4）」の４件法であり，28項目で構成されている。

(b) 向社会的行動の測定：向社会的行動尺度（菊池，1988）を用いた。本尺度は「小さな親切行動」と呼ばれるような向社会的行動を測定する尺度である。回答は「したことがない（1）」から「いつもした（5）」の５件法であり，20項目で構成されている。

(c) 身体的攻撃行動の測定：Buss-Perry攻撃性質問紙（Aggression Questionnaire：Buss & Perry，1992；安藤・曽我・小西・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井，1999）を用いた。情動的側面である「短気」，認知的側面である「敵意」，行動的側面である「身体的攻撃」と「言語的攻撃」の下位尺度で構成されている。回答は「まったく当てはまらない（1）」から「非常に良く当てはまる（5）」までの５件法であり，24項目で構成されている。本研究においては「身体的攻撃」の項目のみ使用した。

3．調査手続き

講義終了後の教場にて本研究の説明と調査協力願いを伝え，調査用紙を配布し，その場で調査用紙を回収した。

4．倫理的配慮

本調査への参加は強制的なものではなく，不参加や中断によって一切の不利益が生じないことと，個人情報に関する保護に関して，講義終了後に文書および口頭において十分に説明を行った。同意が得られた者のみ無記名で回答を求め，アンケートに回答するという行為をもって，本研究参加に同意したとみなした。なお本研究は，「早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を得て行われた（承認番号：2011-087）。

5．分析方法

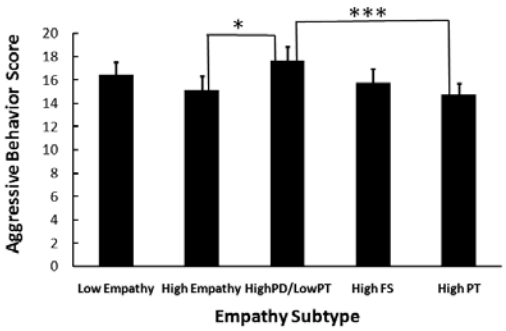
統計ソフトウェアSPSSを用い，クラスター分析を行った後，各クラスターを独立変数とし，「向社会的行動」と「身体的攻撃行動」を従属変数とした一元配置分散分析を行った。

結　果

共感性を類型化するためのクラスター分析を

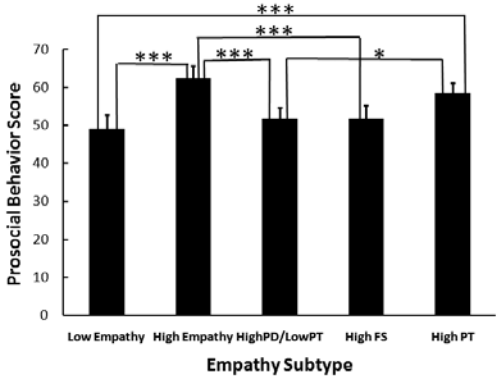
行った結果，５つのクラスターが示された。具体的には，共感性要素が全般的に低い「低共感性型」，共感性要素が全般的に高い「高共感性型」，個人的苦痛得点が高く，視点取得得点が低い「高ＰＤ（personal distress）・低ＰＴ（perspective taking）型」，個人的苦痛得点・視点取得得点が共に低く，空想得点が高めの「高ＦＳ（fantasy）型」，共感性全般は中程度で視点取得が高い「高ＰＴ型」のクラスターが示された。

次に，一元配置分散分析を行い，共感性のクラスター間における社会的行動得点（向社会的行動・身体的攻撃行動）の差を検討した。その結果，身体的攻撃・向社会的行動ともに有意な差が示された（身体的攻撃得点：$F(4, 327)=4.43$，$p<.05$，向社会的行動得点：$F(4, 327)=11.83$，$p<.05$）。多重比較を行った結果，身体的攻撃においては，「高ＰＤ・低ＰＴ型」が「高共感性型」や「高ＰＴ型」よりも有意に高い値を示した（Figure 1）。向社会的行動においては「高共感性型」が「低共感性型」や「高ＰＤ・低ＰＴ型」，「高ＦＳ型」よりも有意に高い値を示し，また，「高ＰＴ型」は「低共感性型」や「高ＰＤ・低ＰＴ型」よりも有意に高い値を示された（Figure 2）。



Note
PT : Perspective Taking, FS : Fantasy, PD : Personal Distress
*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Figure 1 Aggressive Behavior Score



Note
PT : Perspective Taking, FS : Fantasy, PD : Personal Distress
*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Figure 2 Prosocial Behavior Score

考　察

身体的攻撃行動に関しては，「高共感性型」と「高ＰＴ型」のクラスターにおいて身体的攻撃得点は低く，先行研究と同様の結果を得た。このことから，身体的攻撃の抑制において，視点取得という共感性の構成要素が重要な役割を果たしていることが考えられる。しかしながら，「高共感性型」および「高ＰＴ型」との比較において，有意差が示されたのは，「低共感性型」ではなく「高ＰＤ・低ＰＴ型」であった。この結果から，被共感者が被害に遭っている場合，認知的側面である視点取得による統制が維持されていない個人的苦痛の高まりにより，共感的な怒りが生起し，共感の対象者に被害を与えている者に対して身体的攻撃行動が生起する可能性が考えられる（Hoffman. M. L., 2000, 菊池・二宮訳，2001）。向社会的行動に関しては，「高共感性型」と「高ＰＴ型」のクラスターにおいて向社会的行動得点が高く，身体的攻撃得点が低いクラスターと同様の結果が示された。しかしながら，「高ＰＴ型」と「高ＦＳ型」との間には，有意差が示されなかった。このことから，向社会的行動は視点取得のみで促進されるとは限らず，共感的関心や空想といった他の

共感性要素の働きも重要であることが示唆された。

本研究の結果から，視点取得を伴った共感性の高さは，攻撃行動の抑制および向社会的行動の促進に共通して関連があると考えられる。しかしながら，身体的攻撃行動の抑制と向社会的行動の促進では，共感性構成要素間のバランスとの関連の仕方が異なることが示唆された。向社会的行動の促進には，共感性構成要素を全般的に促進していくことが有用であると考えられる。一方で，身体的攻撃の抑制をターゲットとする場合には共感性の促進が社会的に望ましい行動の促進につながるとは限らないことが考えられる。低共感性型と他との間に有意差が認められなかったことからは，全体として共感性が低くとも，各構成要素がバランスのとれた統制を維持する場合には，問題行動につながりにくいと考えることもできる。先行研究においても非行少年は一般群と比較して情動的共感性が高く，認知的共感性が低いという知見が得られている（奥平・木村・古曳・高橋・来栖・徳山・井部，2005）。このことから，円滑な社会生活を送るためには，身体的攻撃を行わないことも，向社会的行動を生起することも重要であるが，具体的な支援場面では，どちらの行動をターゲットにするのかを明確にする必要があると考えられる。

本研究の結果から視点取得による統制のとれていない個人的苦痛の高さは，共感の対象者に被害を与えている相手に対する身体的攻撃につながることが考えられる。しかしながら，本研究は調査研究であり，対象者を指定していない。したがって今後は共感の対象者と行動の対象者を明確にして検討を行う必要がある。さらに，高い視点取得を有する者（高共感性型・高ＰＴ型）においては，視点取得以外の共感性構成要素も中程度もしくは高いという特徴を有していた。共感性の各構成要素間の関連に関しては，認知的側面から情動的側面に至るプロセスが示されている（葉山・植村・萩原・大内・及川・鈴木・倉住・櫻井，2008）。このことから，視点取得などの認知的共感性を調節する事により，その他の共感性構成要素も促進あるいは調節されることが考えられる。そのため，今後は視点取得と他の構成要素との関連をさらに詳細に検討し，不均等な共感性の構成要素間におけるバランスの操作可能性について検討する必要がある。

今回の研究を基礎的資料とし，今後さらに検討を行うことにより，共感性という変数を媒介させてターゲットとする社会的行動の改善につながる，より適切な介入方法への糸口となることが望まれる。

引用文献

Davis, M. H.（1983）. Measuring individual differences in empathy : Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology,* **44**, 113–126.

櫻井茂男.（1988）. 大学生における共感と援助行動の関係―多次元共感測定尺度を用いて―. 奈良教育大学紀要, **37**, 149–154 (Sakurai S.（1988）. The Relationship between Empathy and Helping Behavior in College students. *Bull. Nara Univ. Educ.,* **37**, 149–154)

葉山大地・植村みゆき・萩原俊彦・大内晶子・及川千都子・鈴木高志・倉住友恵・櫻井茂男.（2008）. 共感性プロセス尺度作成の試み. 筑波大学心理学研究, **36**, 39–48 (Hayama D., Uemura M., Hagiwara T., Ohuchi A., Oikawa C., Suzuki T., Kurazumi T. and Sakurai S.（2008）. *Tsukuba Psychological Research*, **36**, 39–48)

Hoffman. M. L.（2000）. Empathy and Moral Development implications for caring and justice, Cambridge

university Press（菊池章夫・二宮克美（訳）．(2001)．共感と道徳性の発達心理学，川島書店）

岡本英生・河野荘子．(2010)．暴力的犯罪者の共感性に関する研究－認知的要素と情動的要素による検討．心理臨床学研究，**27**，733-737
(Okamoto H and Kono S. (2010). A study of empathy in violent offenders : An examination based on cognitive and affective factors approach, *Jornal of Japanese clinical psychology,* 27, 733-737)

奥平裕美・木村正孝・古曳牧人・高橋哲・来栖素子・徳山孝之・井部文哉．(2005)．共感性と他者意識に関する研究．中央研究所紀要，**15**，203-218
(Okudaira H, Kimura M, Kobiki M, Takahashi S, Kurisu M, Tokuyama T and Ibe F)

Richardson, D. R., Hammock, G. S., Smith, S. M., Gardner, W., & Signo, M. (1994). Empathy as a cognitive inhibitor of interpersonal aggression. *Aggressive behavior,* **20**, 275-289

登張真稲．(2000)．多次元的視点に基づく共感性研究の展望．性格心理学研究，**39**，36-51
(Tobari M. (2000). Empathy as a multidimentional construct: A review of research on empathy. *The Japanese Journal of Personality,* **9**, 36- 51.)

Association between Social Behavior and Balance of Empathy

Yuka SATO *, Shoji IMAI **, Yuka MIYAKE * and Hiroaki KUMANO ***

* Graduate School of Human Sciences, Waseda University
** Faculty of Human Care, Nagoya University. of Arts and Sciences
*** Faculty of Human Sciences, Waseda University

Abstract

Empathy has been shown to be associated with social behavior, and so is an important function for leading a trouble-free social life. The present study was performed to examine the relationships between the balance of empathy components and social behaviors. The balance of empathy components was classified into five subtypes based on cluster analysis. One-way ANOVA was performed with the empathy subtypes as independent variables and the scores of inhibition of aggressive behavior and facilitation of prosocial behavior as dependent variables. The empathy subtypes showed main effects for both physically aggressive behavior and prosocial behavior. While a generally heightened empathy pattern, including high perspective taking, was related to both inhibition of physically aggressive behavior and facilitation of prosocial behavior, a generally lowered empathy pattern showed a negative effect only on prosocial behavior. These observations indicate the need for modification of the means of intervening in empathy components depending on the types of social behaviors to be targeted for change.

Key words：Empathy, Prosocial behavior, Aggressive behavior